

## 会員の広場



### 「NYタイムズ」を読む会のこと

松井 和明 (東京)

元勤務銀行OB会の同好会としてスタート(十二年)。英語の勉強と海外情報の収集を目的としてこの会を企画。毎月定例日にOB会の部屋を借り、タイムズの「オピニオン」(重要テーマにつき広範に建設的意見を交換する場として数ページを充当、数テーマを掲載)からテーマを選び英語の翻訳と併せ「意見」

内容につき議論してきた。以来、会は本年九月で九十年を迎え、会員も十名を超え充実。「意見」の筆者たちは、記者、コラムニスト、学者、専門家などである。終身雇用の日本とは異なり、大学院でジャーナリズムを学んだ独立した専門職である。タイムズの所有者は元記者のザルツバーカー、子息も現役記者とジャーナリズム好きな家族経営である。

タイムズを家で取り、いざ読み始めると、その英語は、新語も多く知らない単語が数千語を超え、長文で関係代名詞の省略、主語・述語の転倒など、どれが・どこまでが主語でどういう構造なのか分からない、などで苦労した。通常の辞書では、掲載質量に限界があり、ネットで検索した辞書で初めて理解でき

ることも多々あった。また、英語の理解と日本語への翻訳は別問題であると気が付いた。

タイムズは、リベラルな知性で真実を追求する。米国憲法修正第一条の民主主義、報道の自由を尊重、その編集方針は「中立」を標榜。その信条として「The truth is worth it」(真実はそれ自体で価値がある)と宣言。十一項目の行動目標を掲げている。内容は「脅しを恐れない」ことを含め、いずれも真実を徹底追及する究極的行動を定めている。

この間の印象的な記事は、温家宝一族の数千億円に及ぶ財産のスクープ(十二年)、ベルサイユのホテルで「NYヘラルド・トリビューン」から現国際版への初改名版と出会ったこと(十三年)、サウジのジャーナリスト、カ

シヨギ殺害事件がビン・サルマン皇太子と遺族間でコーランに基づく、約八十億円の金品授受で決着した(十八年)、トランプ大統領との納税・名誉棄損などの訴訟などで激しく戦い、コロナ情報(パンデミック化、感染力、ワクチンなど)は貴重な情報であった。

年を重ね英語にも馴染む。海外でも英文書が目につく。スリランカでは初期仏教を守り伝える『Buddhism in Sri Lanka』、ミャンマーでは軍部と戦うジャーナリストの『The Face of Resistance』を、アイルランド訪問が、若者の独立蜂起から百年(十六年)に該当『A Pictorial Guide to the 1916 Easter Rising』を買求めた。ドバイのホテルでは英語版コーラン『The Quran』を無料で譲ってもらった。